

協議会ニュース 76号

愛知県自然観察指導員連絡協議会 2000.7



オオタカばかりじゃないよ!

ホンドキツネだって絶滅危惧種。

'99-11-8 フォレストパークに現われたキツネ↑

資料.相地満氏の知多半島のキツネ.講演会から.

←半田市新美南吉記念館の刺繍

「猪高緑地を考えるシンポジウム2000」を企画・開催して

堀田 守（名古屋支部）

平成12年3月5日、猪高緑地の自然を愛する市民有志の各団体が構成母体となり、今回、企画委員会代表として上記タイトルのシンポジウム企画・開催をしました。



テーマは、将来に向け、名古屋市内に残された、自然豊かな猪高緑地をどのような公園にしていくのか、多様な生物、文化をどう残していくか、市民一人一人が考え方行動するきっかけをつくることを目的とし、サブタイトルを「子孫に残そう豊かな森」と定め、一般参加者を募り開催しました。当日は、総勢97名の参加を得て、成功裡に終える事ができました事を報告させていただきます。企画開催に向け、昨年10月に「シンポジウム2000企画委員会」が発足、名東自然俱乐部を中心に、幾度も会議が重ねられ、無事終えることができました。

21世紀の地球環境を考える為の足固め、さらには、次世代への子供達に豊かな本物の自然を体験させる場としての公園事業のあり方、尾張東部の丘陵地帯の動物達のためのグリーンベルト構想の一部として、猪高緑地の森の考え方、自然に対する配慮、生態園としての考え方、人と自然との関わり、都市中の公園のあり方、豊かな自然生態系は市民の財産である事等々、いろいろな意見や考え方が出されました。大変意義のある意見と、反響の大きさには活気が感じ

られ、参加者の皆さんにも充分満足して頂けたのではと自負しています。

今回のシンポジウムを通して、自然観察指導員の活動・役割の一端には、自然観察会の開催だけではなく、市民の方達への自然情報の提供・市民と行政機関とのパートナーシップの仲立ち、市民と行政サイドが共に協力しあい、その場所にある自然をベースにそこの潜在力を引き出し高める、質の良い自然環境を残す為の努力をしていく必要性を再認識しました。都市の発展と自然環境の破壊については、相反するところが多くあります。しかし、いくら自然豊かな森であっても放置されていればどうなるか？地域ごとにそれぞれの特長を備えている自然環境をどの様に保全しなければならないか？「自然豊かな森を残しましょう」といっても、自然豊かであるという事に対する考え方は人により、それぞれ千差万別です。自然観察指導員として助言する際、その地の自然をよく観察して知っている事、自分なりの自然環境に対するコンセプトを持ち続けている事が、絶対的に必要だと感じました。今回のシンポジウムを第一歩として、今後勉強会の開催・シンポジウムの企画をとの声も地元住民の方より出てきました。名古屋市の東部丘陵地帯に、次世代への質の良い自然環境を残す為にも、自然観察指導員の皆様に今後ともご協力・助言を是非お願ひしたいと思います。

【シンポジウムの内容】

シンポジウム2000へのおさそい！

～子孫に残そう豊かな森～

○期日：平成12年3月5日（日）

○場所：名東生涯学習センター

○主催：名東自然俱乐部

○提言：

自然を守れ！……と活動があちらこちらで起きています。対象が珍しい「トキ」「オオタカ」なの？マスコミが取り上げれば保護活動も盛んになるでしょう。しかし、何でもない身近な自然。雑木林・小川・田・畑が、無造作に消えていく現実。子供達の情操や人格形成には、自然と関わり合いながら、自然とふれあいながら育って行くべきではないのでしょうか。猪高緑地の放置された緑地帯は、まだ復元出来る可能性があります。名古屋市民の財産として、多くの貴重な生き物の生態系の場・自然との触れ合いの場・自然豊かな猪高の森を、次の世代へ残す事を期待するのは無理でしょうか？そのため私たちが出来ることは何？ご一緒に考えてみませんか。

【プログラム】

・基調講演

浅井聰司（自然観察指導員連絡協議会

名古屋支部 支部長）

「猪高緑地の自然」

・魅力の紹介と話題の提供

猪高緑地と自然観察／塚の松池／野鳥について／森の利用／市民参加の森作り／エコパーク構想

・パネルディスカッション

「子孫に残そう豊かな森」

コーディネーター／浅井聰司

パネラー／堀田守、近藤繁生、青山裕子、辻本佐知子、飼日本野鳥の会愛知県支部、名古屋市農政緑地局

【参加して感じたこと】

朱雀英八郎（名古屋支部）

*今ままに残せという意見があるが自然はそうはならない。少し手を加えないとダメになり、そのままではうっそうとして入れないくらいになる。

*森は任せて田畠のある自然、特に湿地や小池

に関わっている。そこは生き物が豊かであり森には保水力が必要。何をしてもいいが水を枯らさないことを要望したい。（これまで配慮していない）ぜひ道のない森に一緒に入って考えてほしい。

*観察会の魅力をいうが、PRしても集まりが多くないのも事実だ。

*里山に手を加えるのは大変だ。昔のようにはいかない。そこでいろんな工夫がいる。トンボ池として小湿地を造りヤゴを育てようとした。畑耕作をして菜の花やレンゲ畠も作っている。行政でもそうしてほしい。これらはより豊かな生態系にとの試みでビオトープつくりである。

*学校と違って野外に出かけている。試行錯誤で自然はなかなか思うようにならない。ナンバングセルの保護も。

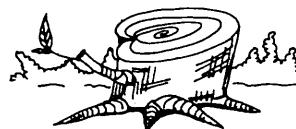
*植生構想図に道が幾つもあるが、道のない、人の入らない保全ゾーン、サンクチュアリを確保すること（北部の中央付近に）。全部利用する発想か。

そこには動物の食べるものがあることが必要で、食草や実のなる木を植えることも考えたい。この点を明らかにしないとビジョンが既成事実で進む面がある。（案を出すとマイナスで、手を入れるのが一番いいことになったりする。）

大池は釣人と共存であるが、人の入らないゾーンがあっていい。

*散策路も広く作ったメリットもある。保育園の子たちがお散歩に集団で来ていた。前は、うっそうとしていて入れなかった。ぜひ観察会など一回だけでなく、来て実状を知って提言してほしい。

*自然とは何か、自然保護とはの理解はさまざま、現実を見て関わりながらお互いに違いを受け止めながら進めたいものだ。



すばる天文台からの報告（改訂版）

山田 博一（尾張支部）

日本の環境教育をやっている代表者として、ハワイ島の文部省の国立すばる天文台に招待されて行って来ました。その報告をいたします。

サドルロードを文部省の4輪駆動車で一路マウナケア山に向かった。この道は、溶岩台地にとりあえず造った道なのでカーブが不自然な曲がり方をして、しかも霧が多く発するため事故が多く、アメリカの自動車保険契約条項の適応外となっている。すばるの職員も事故防止に苦心している。今日は安全保安係が運転してくれているので安心して助手席に座る。

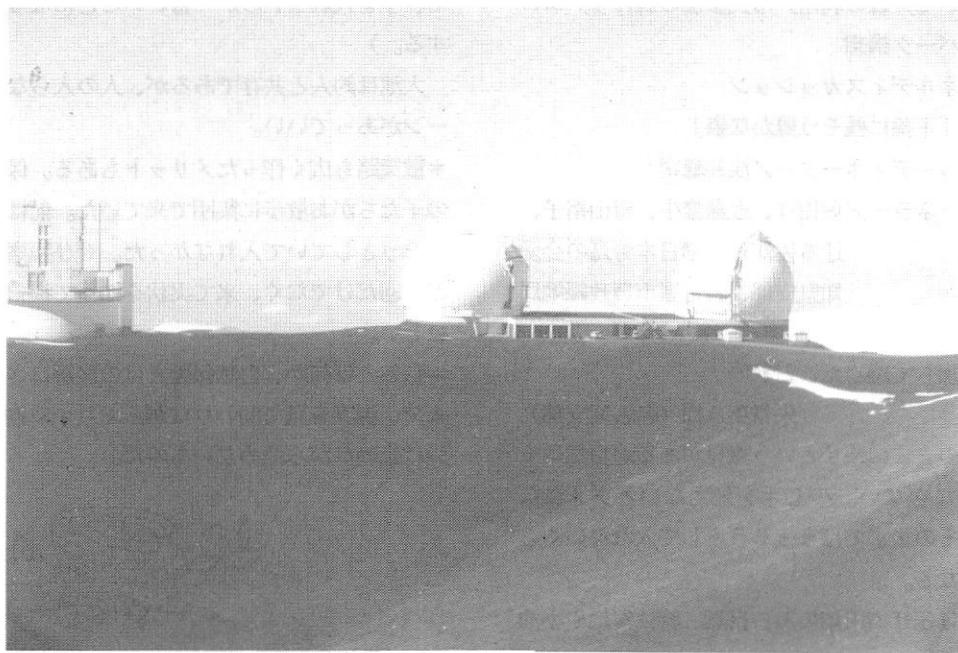
まず、ハレポハク中間施設で「心臓や呼吸器の疾患がないこと、24時間以内にスキューバダイビングをしていないか」と確認され、「一人では行動しないこと。急には動かないこと。水分を取ること。責任者の指示には疑問をはさまず従うこと。疑問に答えている間に手遅れになる。気分が悪くなったら我慢せずに近くにい

るものに誰でもいいから伝えよ」の説明を受け「障害・死亡などの訴追および賠償請求を行う権利を放棄します」という英文の文章に署名し、1時間以上の高地順応を行った。

ハレポハク中間施設（2800メートル）は、すばる天文台をはじめとするマウナケア山頂にある観測所で観測した天文学者達が昼間睡眠をとる宿舎である。近くにオニズカビジターセンターがあり、そこだけは観光客に開放されている。

そこから舗装のない道に入る。はるか向こうにそびえるマウナ・ロア山も4169メートルあるのに、なだらかすぎて、まるで丘のようで高い山には見えない。カメラに入りきらない雄大な景色に見とれているうちに、宇宙に一番近い山の天文台に着いた。

ヘルメットを被って天文台内を歩くと、ファフアとした病み上がりのような感じで、機材を



持って階段を上ると、心臓にきて苦しくなる。ハレボハク中間施設で習った有圧呼吸法で息を整えると落ち着く。しかし、写真撮影などでかがんだ後立ち上ると、くらくらして苦しくなる。すばる天文台の標高4205メートルの世界は、地表の2/3しか空気がないので思った以上に過酷な世界だった。

しかし、私のため、せっかく説明してくれるの、本当は無理してはいけないのだが、がんばる。天文台内の所々に設置してある酸素吸入器の酸素を吸わせてもらうと、体に力がみなぎる。酸素のありがたさを実感する体験だった。

施設の中桐さんからの話でも、ここでは、簡単な計算ができなくなったり、物忘れ、判断ミスがひどくなり、よくものを落とすそうだ。また、どんなことがあってもここでは寝てはいけない。この高さでの睡眠は死につながる。

中はまるで工場のようになっており、足場が悪い。取り入れた光をCCDで測定するための暗い部屋があちこちにある。この高度での酸素不足もあいまって、一般の人を入れない理由がよくわかる。ましてや、観光コースなどはもってのほかである。

中の世界最大の8.2mの主鏡は大変な優れもので、表面精度0.000012mmで世界一の精度を誇る。天文台内にはそれを持ち上げて、取り外す設備があり、ドライアイスの粉末によるクリーニングだけでなく、定期的にその鏡のメッキを塩酸で溶かし、新しく反射面をコーティングするようになっている。また、主鏡を回転するために高精度で微調整できるように回転する壁面にバーコードの読みとり面があったのにはびっくりする。

観測装置には次のようなものがある。それを使ってわかった宇宙の姿は全人類の財産となる。

1. 波面補正光学装置：地球の大気を通る際の画質の劣化を自動的に補正し、ハッブル望遠鏡の3倍の解像力を作り出す。
2. すばる主焦点カメラ：8000ピクセルのモザイクCCDによって非常に暗い天体を

検出できる。

3. コロナグラフ撮影装置：赤外線波長域での回折限界像を撮影でき、星からのジェットやクエーサーなどの観測を行う。
4. 赤外撮影分光装置：低分散から高分散スペクトルを得ることができる。
5. 微光天体撮影分光装置：
6. 冷却中間赤外撮影分光装置：原始銀河・星生成領域・恒星間塵の観測
7. 高分散分光器：リチウム・ベリリウム・ホウ素等の元素の存在量を調べ宇宙の進化や構造を探る。

すばる天文台を降りた後、文部省国立天文台ハワイ観測所も見学させてもらった。そこでは、すばる天文台で入手した情報を分析するため巨大なスーパーコンピュータが稼働しており、コンピューターをメンテナンスするために富士通の職員もいっしょに働いている。産学一体の協力体制がとられている。そこで、海部宣男所長や有井事務長にも会うことができた。所長は私に、「ここでは世界に誇る最新の技術とすばらしい研究者によって、宇宙の謎を解き明かしています。それを多くの日本のみなさんに伝えて下さい」と言われました。

また、ハワイ大学などのアメリカの大学では、大変レベルの高い環境教育の取り組みがされています。その中には自然観察が含まれています。日本では、まだまだ日の目を見ていませんが、将来必ず、自然観察会は評価されます。みなさんも頑張ってください。

次回は、世界最大の光学・赤外線望遠鏡、最先端の観測装置と今までの活躍を述べます。



緑のペスト

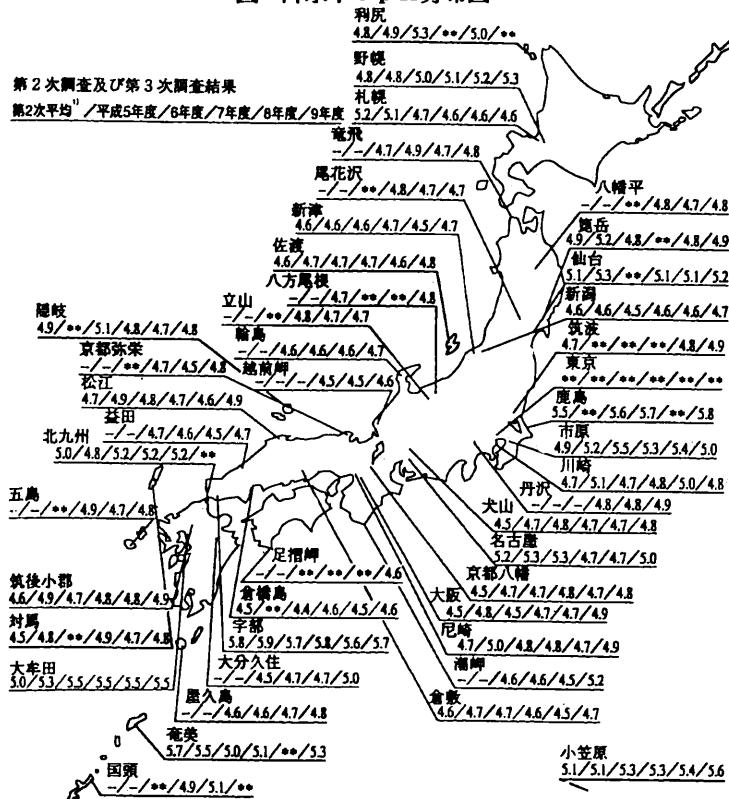
編 集 部

大気中に約0.03%含まれる二酸化炭素、地球温暖化の原因物質でもあるこの二酸化炭素が、降雨に十分溶け込むと、雨水のpHは約5.6となります。pH7が中性ですから、普通の状態の雨（汚染されていない雨）は、大気中の二酸化炭素が溶け込んで、pHは5.6~6.0の酸性の状態です。これに硫酸や硝酸などの酸が溶け込むとpHはさらに低くなります。

この pH 5.6 より低い酸性の雨を酸性雨と呼んでいます。

また、現在では、酸性の強い霧や雪（雨を含めて「湿性沈着」という）や、晴れた日でも風に乗って沈着する粒子状（エアロゾル）あるいはガス状の酸（合わせて「乾性沈着」という）を合わせたものを広義の意味で酸性雨とされています。

図 降水中の pH 分布図



- : 未測定

**：無効データ（年判定基準で棄却されたもの）

注：1) 第2次調査5年間の平均値（欠測、年判定基準で棄却されたもの）

2) 東京は第2次調査と第3次調査では測定所位置が異なる。

3) 倉橋島は平成5年度と平成6年度以降では測定所位置が異なる。

4) 札幌、新津、筑岳、筑波は平成5年度と平成6年度以降では測定頻度が異なる。

5) 冬季閉鎖地点(尾瀬、日光、赤城)のデータは除く。

「酸性雨」はヨーロッパで

資料：環境庁

※ 「酸性雨」はヨーロッパでは「緑のペスト」とも呼ばれています。

【なぜ雨水に酸が含まれるか】

石油や石炭などの化石燃料を燃やすと、硫黄酸化物や窒素酸化物が発生します。これらが大気中を長い間漂ううちに酸化され、硫酸や硝酸になり、雨水に溶けて酸性の雨となるのです。

具体的には、工場などが重油などを熱源として使用する際に重油中に含まれる硫黄分が硫黄酸化物として大気中に放出されます。また、工場の他にも、私たちが利用する自動車からも、ガソリンなどの燃焼に伴い、空気中の窒素も同じように燃やすために発生する窒素酸化物が原因となっています。

酸性雨は原因物質の発生源から500～1000キロも離れた地域に沈着する性質があり、国境を越えた広域的な現象でもあり、北欧での被害がイギリスや東欧などから排出されたものが原因とも言われており、わが国においても、中国大陸からの雨雲が、日本海を渡って影響を及ぼしている（日本海側の測定局で冬季に硫酸イオン、硝酸イオン濃度及び沈着量が増加する傾向が認められる）と言われています。



【どのくらいの酸性雨が降っているか】

環境庁が実施した調査結果を図に示しました。第3次酸性雨対策調査（平成5年度から平成9年度まで）の結果によれば、調査期間中の降水中のpHは4.8～4.9（年平均値の全国平均）と、第2次調査の結果とほぼ同じレベルの酸性雨が観測され、これまで森林、湖沼等の被害が報告されている欧米と比べてもほぼ同程度の酸性度となっています。

【酸性雨の影響は】

酸性雨により、湖沼や河川等陸水が酸性化し魚類等へ影響を与えること、土壤が酸性化し森林等へ影響を与えること、また、酸性雨が直接樹木や文化財等に沈着することにより、これらの衰退や崩壊を助長することなどの広範な影響が懸念されています。酸性雨が早くから問題となっている欧米においては、酸性雨によると考えられる湖沼の酸性化や森林の衰退等が報告されています。

～魚類等への影響～

一般に、水の中の動植物の生存限界のpHは4.5程度と言われています。大体pH5.5前後から魚類の生存が危うくなって、4.5以下では全く生存できません。なぜ、酸性の水に魚が住めないかというと、魚の卵の孵化が不可能になること、また、酸性化が進むと土壤中に含まれるアルミニウムなどの毒性の強い金属が溶け出し、その濃度が高まることなどがいわれています。

酸性化が進むと、まず、小さなプランクトンが死滅し、それをエサにしていた小魚が死に、さらに大魚が死んでいくといったように生態系が崩れていくと考えられています。

～森林への影響～

森林崩壊のメカニズムはまだ十分解明されていませんが、土壤が酸性化して毒性を有するアルミニウムが溶出し、それが森林を枯らすという土壤酸性化説のほか、水素イオンが土壤表面に付着しているカルシウム、マグネシウム、カリウム、ナトリウムなど植物の重要な栄養分を流し去る土壤塩類欠乏説などがいわれています。



環境庁は、わが国における酸性雨による生態系等への影響は現時点では明らかになっていないとしています。しかし、酸性雨の影響が主と思われる森林の立枯れや木々の白骨化現象が全国的に顕在化しつつあるとの指摘もあります。例えば、関東地方一円では、筑波山（ブナ・スギ）、奥日光白根山（スギ）、男体山・念佛平（オオシラビソ・ダケカンバ・ユメツガ）、赤城山（シラカバ・カラマツ・モミなど）、尾瀬アヤメ平（オオシラビソ・ネズコ）、谷川岳（ミネカエデ・ムシカリ）、奥秩父甲武信岳（シラビソ・ダケカンバ）、丹沢大山（モミ）、丹沢蛭ヶ岳（ブナ）などで、広範にわたって森林の立枯れ現象が起こっています。

»»»観察会で使える環境の話（その7）

公園の光害

編集部

光害という言葉を聞いたことがありますか？ “こうがい”と読まずに“ひかりがい”と読みます。光害とは、良好な照明環境の形成が、漏れ光（照明器具から照射される光のうち、その目的とする照明対象範囲外に照射される光）によって阻害されている状況またはそれによる悪影響を言います。

平成11年版の環境白書では、過度の夜間照明の使用は、ほうれん草や水稻等の作物不良や、ホタル・ウミガメ・鳥類等の生育に影響を及ぼすこと。また、照明により夜空が明るくなり天文観測が困難になることも光害の一つとしています。

私たちの自然観察会は、夜行われることは少ないかもしれません、公園などの照明が昆虫などに影響を及ぼすことはよく知られています。例えば、夜鳴きゼミの出現です。

また、街路樹のプラタナスは、街路灯に近い部分だけ冬でも葉が落ちないとも言われています。

また、青銅製や大理石でできた屋外彫刻への影響もあります。例えば、国宝に指定されている青銅製の鎌倉の大仏では、目・口・首・背中などが、さびで激しく劣化しています。雨の跡が残った屋外の銅像などを見たことはありませんか。全てが酸性雨が原因とは言えないかもしれません、酸性雨により腐食を進行させている可能性は十分あるように思います。

愛知県内での状況については、その報告を知りませんが、図で見られるように全国的には同じような酸性雨が降っている状況から推察すれば、生態系に何らかの影響が出てきていても不思議ではないように思われます。

す。

明るすぎる都会の光は、動物や植物の生活リズムを狂わせているのかもしれません。

照明は誰のためのものか？それは人の安全確保を目的に行われるのですが、公園などの照明を見ていると、公園が設置された当初の照明の位置等の悪さのために、後に植物、特に樹木が生育して枝や葉の陰になってしまい、暗くて夜は歩けないなどの理由で、樹木の剪定が行われたりしています。樹木のために必要な剪定もありますが、そうでない場合もあるようです。

観察会では自然のものが対象になり、人工物は対象外にしていることが多いと思いますが、照明が施されている場所で観察会を実施する場合、その照明が周囲の植物などに与えている影響を見てみたり、どういう形の照明が望ましいか考えてみることもおもしろいかもしれません。

(了)

『東海の自然保護を考える研修会』を終えて

金谷真奈美（尾張支部）

日 時：平成11年10月30日、31日

場 所：愛知県労働者研修センター（定光寺）、海上の森（瀬戸）

参加者：47名

内 容：基調講演 小野木 三郎さん（岐阜県自然観察指導員連絡会会长）

パネルディスカッション 大竹 勝さん（愛知県自然観察指導員連絡協議会会长）

小笠原 昭夫さん（日本野鳥の会）

小野木 三郎さん

加藤 光広さん（三重県自然観察指導員連絡会会长）

桜川 菊藏さん（ネイチャースクール）

グループワーク、懇親会、全体会、自然観察会

今回、「共に学び、考え、語り合える時間をもちませんか？」といったキャッチフレーズの基に、みんなで自然保護活動について学び、今後の活動に役立つような場にしていくこと、またお互いの情報交換をする中で、困った時に助け合えるような仲間作りが出来る場になることを望んで、この研修会を立ち上げました。そして、自然が好きで、これから何かを始めようという方から、すでに地域のために多くの自然保護活動をしている方まで、幅広い層の方々に参加して頂くことが出来ました。経験の差こそあれ、自然を守りたいという前向きな気持ちは誰もが持っていて、活発な意見交換の中で、自然を生態系でとらえた観察会の大切さ、人材作りの大切さ、地域での地道な活動の大切さなどが意見として述べられた以外に、行政との関わり合いの難しさや若年者層の活動が少ないなどの問題点も挙げられていました。

2日目のパネルディスカッションについては、その問題点を中心に話が進み、結論は出ないまでも、ある程度今後の活動の指標となるものは得られたと思います。また、懇親会についても盛り上がり、11時半に「一旦お開きにします」。」といつても誰も寝ようとせず、結局

30人近くの人が夜半まで起きていました。

私個人としては、事務局として研修会の運営に携わり、会を立ち上げることの大変さがつくづくと身にしみています。たくさんのトラブルを抱えて、一時は先が全く見えなくなり、泣きたい気分で1つ1つのトラブルに対処していました。今、無事に研修会を終え、10名以上の方から、「本当に良い研修会でした。」「とても有意義な時間でした。」「勉強になりました。」等などの声を頂き、やっぱり研修会をやってよかったのだという実感が少しあは持てました。

今回、忘れてはならないのは、最終的に参加してくださったパネラーの方々のご協力により、このような成果が得られたのだということです。1人1人の先生方が、個性的で場を盛り上げるのにふさわしい話をしてくれたといった事以外にも、会の準備段階からずいぶん支えになるようなお言葉を頂いています。その言葉があったからこそ、私たちは、研修会を行う事に前向きになれたのだし、そういう意味では、本当に言葉にできないような感謝の意を持っています。

研修会の中で出来る事は限られています。

「ネットワーク作りを提案します。」と会のパンフレットには書いてありますが、私たちの器量では、そこまでには至りませんでした。でも、急がず一步づつ何が出来るのか摸索しながら、これからの方針を考えていきたいと思います。少なくとも、今回研修会に参加した仲間同士は、顔見知りにはなれたわけだし、そういう意味でもネットワーク作りの第一歩は踏み出せたと捉えています。これからも自分たちで出来ることを無理せず一步づつ進めていきたいと思って

います。

そして、最後に事務局としては、全くいたらぬ私がやっていたにもかかわらず、協力してくれた方々の心の広さのおかげで、何とか研修会を形に出来たのだと思います。陰で力になってくれた方々には、この紙面をかりてお礼を言わせて頂きます。ありがとうございました。皆様のご協力をこれからもよろしくお願ひします。

東海の自然保護を考える研修会事務局（金谷）

四季の気候

佐藤国彦（名古屋支部）

自然は気候によって変わり、気候は自然によって彩りを与えられます。四季の自然を楽しむときに、気候の変化にも目を向けることによって、また新しい視点が生まれると思います。

平成11年度の平針の定例観察会では、テキストで気候の状況について毎回シノーズで掲載しましたので、ここでそれを1年間まとめました。

＊＊＊＊＊

《季節ごとの気候の特徴》

※ 春の気候

3月に入る頃から、大陸の高気圧の一部がちぎれて移動性高気圧となり、日本付近を通るために、天気は周期的に変わるようになる。また、日本海に低気圧がよく現れ、これに吹き込む気流により、太平洋側の地域は強い南風が吹くことがある。3月下旬から4月初めに、移動性高気圧が北に寄って通る場合、本州の南岸に前線が停滞気味となるため、冷たい雨が降って、天気がぐずつくことがある。

（春霖、菜種梅雨）

また、移動性高気圧には、温暖なものと寒冷なものがあり、寒冷なものが通ると思いがけない寒さに見舞われることがある。これは5月始めまで起こることがある。（寒の戻り花冷、八十八夜の別れ霜、忘れ霜）

4月下旬頃から大きな帶状の高気圧に覆われるようになり、安定したさわやかな好天が続くことが多く、気温も上昇する。5月に入ると、太平洋高気圧の勢力が増して、温暖な気候となる。5月下旬になると、梅雨前線が北上の気配をみせ、年によっては梅雨の走りと言われる雨となることがある。

※ 夏の気候

オホーツク海の高気圧が日本海へ張り出し、太平洋高気圧も勢力を増すため、気圧の谷間となる日本列島の南岸に前線が停滞して、雨の多い日が続くのが梅雨である。梅雨入りは東海地方では6月10日頃が普通であるが、年による変動も多い。（東海地方梅雨入り：平成9年6/8、10年6/2、11年6/3）

梅雨前線の南側は暖かく湿った空気が吹きこれが前線からは北東気流の上を吹き上がつて、前線の北側は700km位の広い範囲にわたって雨や曇りの天気になる。（梅雨はアジア極東部だけのもので、中国南部から西日本にかけて起こる。）

梅雨の間でも、太平洋高気圧が弱まつたり、日本付近を移動性高気圧が通つたりしたときは、前線が南下して、一時的な好天になることもある。（梅雨の中休み）

梅雨の後半になり、太平洋高気圧が勢力を増してくると、梅雨前線が日本内陸部を通り、各地で雨天が続くことが多い。特に、前線に沿つて低気圧が通つたり、南方海上に台風があつて北上する場合は、集中豪雨となる。

梅雨前線が日本海に抜けると太平洋高気圧の領域に入り、天気は安定して真夏となる。この梅雨明けの時期は、早い年で7月10日頃遅い年には8月1日頃で、7月中旬が多い。
(東海地方梅雨明け：平成9年 7/19、 10年 7/31、 11年 7/22)

8月は太平洋高気圧が日本を覆い、南寄りの季節風が吹き、気温の高い日が続く。台風が南海上で発生するが、多くは高気圧の東端を北上するため、一般には当地方にはあまり影響をもたらさないが、高気圧の位置や勢力によっては、西日本に近付くこともある。

愛知県の雷は、岐阜県西濃地方から東南へ進むもの、鈴鹿・養老山脈で発生して東進するもの、木曽川上流域に発生し南下するものが多い。

冬の気候

8月半ばを過ぎると、大陸に冷たい高気圧が現れ始める。梅雨明けに北上した前線は南下して、例年9月上旬から10月初めまで本州南岸に停滞し、雨が多くなる。これを「秋霖（けうりん）」という。東日本では比較的顕著であるが、西日本では梅雨ほどはつきりせず雨がやや多い程度のこともある。

名古屋付近に近づく台風は、気圧配置等により8月上旬からあるが、傾向としては9月上旬から10月上旬までが多いと言える。太平洋高気圧の勢力のある夏の台風は、九州方面から来るが、秋にはいると中部や関東に上陸する機会が増える。

10月半ば頃から大陸の高気圧が発達するようになり、その一部が移動性高気圧となって日本付近を通過する。天高く馬肥ゆると言われるように、春とは違つて澄んだ青空が広がる。11月半ば頃から大陸高気圧の発達により北西の季節風として寒気が日本へやってくるようになる。一時的に冬型の気圧配置となるが長続きはしない。

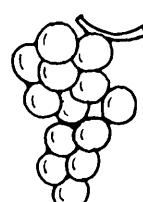
冬の気候

愛知県周辺の冬の気象は、ほとんど北西の季節風に左右される。西高東低と言われる気圧配置により、北西の季節風が強まる。日本海を渡つて、やや暖められ湿った気流は、中部山岳に多量の雪を降らせ、太平洋側では乾燥した吹き下ろしの風となる。

最低気温が0℃以下の日を「冬日」と呼び、最高気温が0℃以下の日を「真冬日」と呼ぶが、名古屋周辺での真冬日は、30年に一度位しかないようである。

一般に西高東低の冬型の気圧配置では、表日本側は好天気が続くが、三陸沖などに低気圧が発達して、気圧の傾斜が強くなると、愛知県などでも思わぬ降雪に見舞われることがある。これは、敦賀付近から、琵琶湖・関ヶ原にかけて高い山地がなく、距離も比較的近いので、この間を雪雲が通つてくるためである。

寒波とも呼ばれる季節風の吹き出しは、冬の間周期的に起こり、その前に日本海に低気圧が発生したり、前線の通過があつて、天気が崩れることが多い。



《二十四節気》

暦の上で季節は、立春・立夏・立秋・立冬により区分される。この各季節に6つの節目を入れて、1年を24に分けたものを「二十四節気」と言う。

これはもともと中国古代の天文学で定められたもので、天の赤道を12に分けてそれを「節」といい、さらにその中間を「中」といい、それぞれに適当な名前を付けて二十四節氣とした。季節の特徴を表しているため、昔の人の季節感を伺うことができる。

- 2/ 4 立春：節分の翌日、春立つ
2/19 雨水：気雪散じて水と為る
3/ 6 啓蟄：地中の虫・蛇・トカゲ等が穴を出る
3/21 春分：太陽が春分点に至り、昼夜の時間が等しい
4/ 5 清明：万物ここに至って皆潔斎にして清明なり
4/20 谷雨：雨百穀を生ずる
5/ 6 立夏：夏に入る日
5/22 小滿：万物しだいに長じて満つる
6/ 6 芒種：芒(むき)ある穀は播種すべき時
6/21 夏至：太陽が夏至点に至る。
7/ 8 小暑：この日から暑中に入る
7/24 大暑：最も暑い時期
8/ 8 立秋：この日から脣の秋に入る
8/24 処暑：暑気が止息する時期
9/ 8 白露：陰気ようやく重なり、露凝つて白き
9/23 秋分：秋の彼岸の中日
10/ 8 寒露：露が寒冷に会って凝結する
10/22 霜降：露凝結して霜となる
11/ 7 立冬：冬に入る
11/22 小雪：雪まだ大ならざる
12/ 7 大雪：積陰雪となって、ここに至って大となる
12/22 冬至：最も日の短い時
1/ 6 小寒：寒の入りの日

1/21 大寒：寒威酷烈を極める

《本朝七十二候》

中国では二十四節氣をさらに三等分して七十二候に分けた。それぞれに「東風解凍」など季節の現象を表す言葉を当てはめたが、この中には「鷹化して鳩となる」とか「雀水に入つて蛤となる」などのおかしなものも混ざっていた。これは、そのまま日本には当らないこともあるため、江戸時代に高井蘭山という学者が「本朝七十二候」として改めた。昔の人の季節感を知るのに良いものである。

- 2/ 4 東風凍(におり)を解く
2/ 9 黄鳥(ういの)さえずる
2/14 魚氷に上る（氷が割れて、魚が氷上に躍り出る）
3/19 土脈潤い起る
2/23 霞始てたなびく
3/ 1 草木萌(さき)し動く
3/ 6 蟻虫戸を啓(ひら)く
3/11 桃始て笑う 3/16 菜虫蝶と化す
3/21 雀始て巣(すく)う 3/26 桜始て開く
4/ 5 玄鳥(づくらわし)至る 4/10 鴻雁北す
4/15 虹始て見る 4/20 蒲始て生ず
4/25 霜止み苗を生ず 4/30 牡丹華(ばなざ)く
5/ 6 蕎(わ)始て鳴く 5/11 蚯蚓(みね)出づ
5/16 竹筍(たけのこ)生づ
5/22 蚕起て桑を食う 5/27 紅花咲く
6/ 1 麦秋至る 6/ 6 蟬螂(せきり)生る
6/11 腐草螢となる 6/16 梅子黄なり
6/21 乃東(うづくま)枯る 6/27 菖蒲華く
7/ 2 半夏(はんげ)生ず（カラスピシャクのこと）
7/ 8 温(あたぬ)風至る 7/13 蓼始て開く
7/18 鷹乃ち学(ばがい)を習う
7/24 桐始て華を結ぶ
7/29 土潤いて溽暑(じれあつ)し
8/ 3 大雨時に行く 8/ 8 涼風至る
8/13 寒蝉(つくづくせし)鳴く

- 8/18 蒙(くら)霧昇り下る
 8/24 綿樹(きわた)開(ひら)く
 8/29 大地始て肅(しづま)る
 9/ 3 禾(いの)乃(むか)ち登(みの)る
 9/ 8 草露白し 9/13 鶲鵠(せきれい)鳴く
 9/18 玄鳥(つばくら)去る 9/23 雷乃ち声を收む
 9/28 蟻虫戸を坏(は)ぐ 10/ 3 水始て渦る
 10/ 8 鴻雁来る 10/13 菊花咲く
 10/18 蝶蝶(ありわむ)戸に在り
 10/23 霜始めて降る
 10/28 霽(こめ)時に施(しく)
 11/ 2 楓葛黃なり
 11/ 7 山茶(つき)始て開く
 11/12 地始て凍る 11/17 金盞(かれん)香し
 11/22 虹藏(かくれ)て見えず
 11/27 朔風葉を払う 12/ 2 橘始て黄なり
 12/ 7 閉塞して冬を成す 12/12 熊穴に蟄す
 12/17 鮭魚(さけ)群る
 12/22 乃東(うづくさ)生ず
 12/27 麋(しか)角解つ 1/ 1 雪下麦を出す
 1/ 6 芹乃ち榮ゆ 1/11 水泉動く
 1/16 雉始て鳴く 1/21 款冬(つかね)華く
 1/26 水沢腹(わ)く堅し

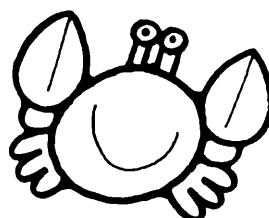
《季節の現象》

雨や風なども季節により、様々な様相を示し、昔の人は生活に関わりの深かった自然現象を観察して、名前を付けていた。こうした言葉も徐々に使われなくなっていくように思われる。

- 油南風(あぶらじ)：東海から中国地方で、4月頃南から吹く湿った温暖な風
- やませ：5・6月頃、東北に冷たい東風が吹き日本海側に寒冷な風を送る。これが続くと冷害をもたらす。
- 五月晴れ：本来は陰曆の5月で梅雨の中休みを指すもの
- 黒南風(くろぬい)：梅雨初めの南風。黒は雲の色。やわらかく吹く。（梅雨終りの南風を

「白南風」という

- 土用：中国では、春は木、夏は火、秋は金冬は水の支配するところとし、各季節の終り18日間を土の支配する時として土用と言ったが、後には夏の土用のみをさすようになった。（土用入 7/21）
- 送り梅雨：梅雨あがりの前の雨で、豪雨となることが多い。
- 半夏(はんげ)雨：七十二候で7月21日を半夏といい、雨が降ると大雨になると言う
- 返り梅雨：梅雨が明けて後、また梅雨性の雨が降ること。
- 初嵐：8月頃、台風の前駆のような強い風が初めて吹くこと
- 萩の声：萩の葉に吹く秋の初風。葉のさやぐ音に秋の到来を感じた
- 青北風(あおき)：西日本で言う風の名。初秋から仲秋の好天に吹く涼気を迫る北寄りの風で、これが吹くと夏が去り、海や空が青くなる。
- 時雨(じくい)：初冬の頃から、雨が急にぱらぱらと少時間降ること。
- 風(ごうじ)：11月頃吹く強い風で、木の葉を落してしまう。
- ベttとう：関東から東海の海岸に吹く、北よりの強風。
- ならい：関東で吹く冬の北よりの風。地名を付けて「筑波ならい」等
- 北風(ぬい)：山から吹きおろす北よりの風伊吹風(濃尾)、比良風(近江)、比叡風(京都)、富士風(関東・東海)、筑波風(関東)等



事務局から

[行事結果]

★ 理事会

〔期日〕平成12年3月20日(月)

〔場所〕名古屋市公会堂 (出席13名)

総会にかける議案、平成11年度事業結果及び決算、平成12年度事業計画及び予算の検討を行いました。現在、協議会の組織等については、検討委員会で検討中ですが、12年度はこの結果を踏まえて徐々に事務局体制などを充実させていきたいと考えています。役員は平成10年度までの任期を1年延長しましたが、12年度については、会長・副会長はそのままとし、監事2名は本人の希望もあって変更することにしました。その他の役員は、従来の理事（各支部長、部会長）や監事をそのまま理事とすることにしました。

その他、組織検討委員会や20周年記念事業の経過報告を行いました。

★ 通常総会

〔期日〕平成12年3月26日(日) 13:30~

〔場所〕産業貿易館 (出席23名)

〔議案〕

① 11年度事業報告 ② 11年度決算

③ 12年度事業計画 ④ 12年度予算

⑤ 役員の選任について

〔結果〕

今回の総会は、案内が遅れたこともあり、特に参加者が少なく、会の運営も曲がり角にあるような気がしました。

1号議案から4号議案までは、各議案とも会の運営等について意見が多くだされました。原案通り可決されました。（決算の数値が今年度も一部違っているという、事務局の不手際などもありましたが。）

第5号議案の役員改選では、総会や会の行事にあまり出席しない者が役員になるのはお

かしいという意見もありましたが、結局賛成多数で原案どおり決まりました。新役員は、次のとおりです。

・会長：大竹 勝

・副会長：竹内哲也、 中西 正

・監事：斎竹善行、 間瀬美子

その他、会の運営等についての意見交換などを行い、その後希望者で懇親会に行きました。

★ 組織検討委員会

⑧ 〔期日〕平成12年6月4日(日) 14:00~

〔場所〕名古屋市教育館 (出席6名)

⑨ 〔期日〕平成12年6月18日(日) 14:00~

〔場所〕名古屋市教育館 (出席5名)

会の設立後20年となるのを契機に、新しい協議会に生まれ変わるべく、委員会を設けて検討しています。この2回の委員会では、新しい組織の内容、規約・規程の変更内容について検討しました。

理事会や役員構成、支部や会員のあり方などの基本的なことは現状のとおりでよいものと思われますが、会の事業執行体制を細分化して多くの会員の参加により充実させる方向を考えています。会議なども、理事会、事業運営委員会、支部長会などを定期的に行い、連絡調整を密にする必要があると考えています。

★ 20周年記念事業実行委員会

⑩ 〔期日〕平成12年4月8日(土) 18:00~

〔場所〕名古屋市教育館 (出席8名)

⑪ 〔期日〕平成12年5月20日(土) 18:00~

〔場所〕名古屋市教育館 (出席6名)

⑫ 〔期日〕平成12年6月18日(日) 18:00~

〔場所〕名古屋市教育館 (出席6名)

記念大会は10月29日で、当日は「自然観察

始めの一歩」「これからの観察会」「「守りたい自然」「環境教育」など4つの分科会を午前中に行い、午後は記念講演会や分科会の結果発表をして、夕方から懇親会という概要に決まりつつあります。講演会にはケビン・ショートさんをお招きできないか検討中です。また、当日は各地の観察会実施場所のPRパネル展、子どもグッズ教室なども行う予定です。

その他、プレ行事として、7月から10月まで定例自然観察会のスタンプラリーを行い、参加者には記念品や大会に招待することになりました。

[行事予定等]

★ ふるさと自然観察会

7/30(日) 湯谷鳳来峡（鳳来町）

10:00 湯谷駅近くパークウェイ入口
駐車場集合（奥三河支部）

8/12(日) 間苞渓谷（額田町）

9:00 間苞渓谷入口事務所前
(西三河支部)

9/10(日) 嵐山周辺（豊橋市）
(東三河支部)

10/15(日) 東山公園（千種区）
9:30 東山植物園正門前集合
(名古屋支部)

12/3(日) 聚楽園公園（東海市）
9:30 聚楽園公園北駐車場集合
(知多支部)

★ 研修会計画

● フォローアップ研修会

9/24(日) 伊勢神峠の自然（奥三河支部）
(10:00 伊勢神トンネル売店)

10/7(土) 造成地等の植生（名古屋支部）
(13:30 天白区平針 針名神社)

11/12(日) 地質の観察（尾張支部）

● 指導員のつどい

11/19(日) 桜淵公園(新城)の観察と芋煮会
(東三河支部)

● 基礎研修会

- 10/9(休) 「子ざもを対象とした観察指導」
- 12/17(日) 「環境教育を考える」
- 2/12(休) 「里山の保護と利用」

★ 協議会20周年記念大会

○ 期日：平成12年10月29日（日）

○ 場所：検討中（名古屋市内）

○ 主な内容（予定）

・分科会（自然観察・自然保護等）
・講演会　　・展示室等　　・懇親会
関連行事として、各地定例自然観察会のスタンプラリーなども始めています。

詳細は次号でお知らせします。10年に一度の大会ですので、多くの会員のご参加を期待しています。御予定ください。

★ 機関誌の発行

昨年からまた機関誌の発行が滞ってしまって申し訳なく思っています。編集体制等を充実させて、定期発行に努めます。今後の発行は次のように実施することを目標としています。

- 77号 9/15 発行
- 78号 11/25 発行 協議会20周年特集号
- 79号 1/25 発行 これより内容一部変更
- 80号 3/25 発行
(機関誌への投稿をお待ちしています。原稿締切は、偶数月の月末とします。特に、78号は、会の20周年特集号としますので、今迄の活動を振返って感じたこと、これから指導員活動に思うことなどの原稿をお待ちしています。)



行 事 実 内

★ ふるさと自然観察会

- 7/30(日) 湯谷鳳来峡 (鳳来町)
10:00 湯谷駅近くパークウェイ入口駐車場集合 (奥三河支部)
- 8/12(日) 関戸渓谷 (額田町)
9:00 関戸渓谷入口事務所前集合 (西三河支部)
- 9/10(日) 嵩山周辺 (豊橋市)
9:30 嵩山小学校集合 (東三河支部)

★ フォローアップ研修会

- 9/24(日) 伊勢神峠の自然 (10:00 伊勢神トンネル売店)
(奥三河支部)

★問合せ先：佐藤 (05617-3-5674) まで

※ 編集後記 ※

ごみ問題が新しい局面を
迎えています。容器包装リ
サイクル法の施行に伴い、
ごみの分別がさらにきめ細
かになるからです。



リサイクルは、再資源化
ということですから、環境にはきっとよ
いことのはずです。しかし、リサイクル
に取り組むエネルギーも大変だろうと思
えます。リサイクルはすべて環境にやさ
しいのか？残念ながらイメージが先行し
て適切な検証データを見る機会を得ませ
ん。

観察会を通して自然を見る目を養うよ
うに、環境問題で簡単には見えてこない
ような側面にも、目が向けるようになればと思います。（近藤）

— 目 次 —

「猪高緑地を考えるシンポジウム2000」 を企画・開催して	1
すばる天文台からの報告（改訂版）	3
緑のペスト	5
公園の光害	7
「東海の自然保護を考える研修会」 を終えて	8
四季の気候	9
事務局から	13